

## 004 TICA

題名	作者	コメント	コメコメ
名もなき毒 (幻冬社)	宮部みゆき	青酸カリ、土壌汚染のふたつの毒が出てくるが本当の毒は人間だと、身も蓋もなく一言で言うとなんな話。その毒には名前がないと言うけれど、この本を読む限りではそれを『嫉妬』とか『絶望』って呼ぶんじゃないかと思う。ところどころに出てくる過去に関わった事件の詳細が最後まで明かされないなあと思っていたら、この本は『誰か』の続編だった。宮部ファンだと名乗る私は『誰か』をまるで覚えていない。宮部みゆきの最近の現代ミステリーはつまらん。秋山省吾という、名前の素敵なキャラがみんなの支持を得るだろうと宮部みゆきの思惑(推測だけ)どおり私もこの人が好きだからこの人で話を書いた方がいいんじゃないかと思う。	『誰か』と出版社が違うから続編と謳ってないの？  ☆☆
船泊まりまで (小学館)	片山恭一	精神を病んだ妻と、彼女に同調していく夫。あやうく悲しく美しい、愛の道行き。二人の生活を楽しむ夫婦に突然、妹夫婦から代理母の依頼が。受け入れたものの、妻の精神は次第に壊れていく・・・心を揺さぶる感動の物語。だそうです、私の心は揺さぶられませんでした。	失敗失敗、こりゃ丸出ダメコちゃんだった。  ☆
赤い指 (講談社)	東野圭吾	息子が幼い女の子を殺してしまい、それを痴呆症の母親の罪にしてしまおうとする夫婦。この本に関して藤原信也の言葉が載っていた。『父親の存在感が薄れ母は父母の役割を担う全能の存在。複合的な負担を一人で抱え、孤立し、不安になり揺れる姿は子に影響を及ぼし、母もまた時代の被害者である』	母と子という一番小さい核って動じなさそうだけど意外に危ういのかな。  ☆☆
チーム・バチスタの栄光 (宝島社)	海堂 尊	心臓移植の代替手術である「バチスタ手術」の専門チームが三例続けて術中死が発生。そこで内部調査の役目を押し付けられたのが畑違いの不定愁訴外来田口と厚生労働省の白鳥だった...。第4回『このミス』で最優秀賞を取った作品。応募の時は『チームバチスタの失敗』って題名だった。プロはうまいね、『栄光』の方が断然いいもの。白鳥のキャラが奥田英朗の伊良部先生にそっくりだった。	犬関係の最大の苦手な話が出て来るのがどうにも困った。  ☆

<p>東京ダモイ (講談社)</p>	<p>鏑木 蓮</p>	<p>第52回(2006年)江戸川乱歩賞受賞作。 シベリア抑留のなかで不可解な死を遂げた中尉。その第一発見者である高津が、58年後シベリア抑留生活を詠んだ俳句集を自費出版しようとしている中、シベリアで看護婦をしていたロシア人女性の殺害事件が起き、高津が失踪する。出版社の青年榎野の生活観を対比させることで、高津の60年近い孤独と沈黙が余計に悲しくなる。</p>	<p>ダモイというのは『帰還』ってことだそうです。</p> <p>☆☆</p>
------------------------	-------------	--	---

2006年文春国内ミステリーの1位が『名もなき毒』で、3位が『チームバチスタの栄光』で4位が『赤い指』なんだそうなの。ふ〜ん、って感じ。

ひとつ疑問が。

2006年の本屋大賞にランクインしているものの多くが、文春だと2005年になってるのは何故なんですよ？

